

幼児前期の発達と保育

—1~3才—



津 守 真

三才以前の幼児の保育は、家庭保育がその大部分であると考えられている。また、母親が働いていて、保育の責任を果すことができない場合に、保育所の保育が必要になる。現状では、幼児前期の保育をいうときには、この二つのいずれかが考えられている。そのいずれの場合にも、この年令の幼児の発達の必要をみたまなければならぬ。この年令は、人間のパーソナリティの形成の上に重要な時期であって、家庭児がみたまわれている発達の必要は、保育所児であっても欠いてはならないのである。

幼児前期の保育は、家庭保育と保育所保育のみではない。家庭で母親が十分な保育をしながら、毎週一定の時間通うような保育機関も必要である。このような保育機関は、ナースリースクールとよばれる。日本ではこのようなものは未だほとんど見られないが、これは、家庭保育の上に、さらに加えて考えられてよいものである。外国の例をみても、一、二才児の保育は、かならずしも毎日であることを要せず、むしろ、週、一、二回、あるいは三回くらいで、時間も、一、二時間という短時間の場合が多く見られる。今後、わが国でも、幼児前期からのナースリーができてくるであろう。

この三つの場合のいずれに当たっても、幼児前期の発達から考えたときの保育上の留意事項について次に述べる。

一 幼児前期の保育の課題

(1) 幼児前期の子どもは、ささいなことで動機づけをして子どもにも意欲を起こさせることもできるし、また、情緒不安定になることもあるので保育者は、子どもの気持ちの動きに敏感でなければならぬ。

この年齢の子どもは、身近な日常生活においても、毎日、新しい経験にぶつかっているのであって、おとなにとってはあたりまえのことでも、子どもには新しい発見であることもある。また、ずんずん伸びてゆく能力は、同じ環境の中にも、子どもに新しい眼を育みつつある。

いすの上によじ登れるようになった一才一〇ヵ月の子どもにとつては、棚の上のものが急に魅力的なものとなり、棚の上のものをひきずりおろす遊びをはじめめる。また、友だちといっしょにいるおもしろさを知った二才半の子どもにとっては、友だちが自分のことをかえりみないでさっさと行ってしまったというようなことが、悲しみとなっている。きのうまでそんなことは感じなかったのに、きょうから、友だちの存在が身近に感じられるようになるのである。幼児前期には、保育者が、子どもの日日の発達を感じることができにくく、発達も早いので、子どもの日日の変化に気がつくこと

いうことは、この時期の保育にたいせつなことといえよう。

次に、いくつかの具体的な例を挙げてみよう。

二才六ヵ月の女兒である。妹のTが近寄ってくると、自分のものをとられるのかと思って、つきのけたり、アーといって怒り、妹がかみつくといって泣いたりしていた。(実際には、そんなことはなく、ただ近寄ってきただけである)母親は、妹は何もとうとうとしているのではないこと、イイモノ持ッテルナッテ近クニクルンデシヨ、というようにいっていた。ある日、いつものように、妹が近づいて手をだすと、この二才半の子どもが「Tチャン、ナニシヨウトシテンノ」とたずねたのである。これは、相手の存在に気がついた発言である。それからしばらくして、遊んでいるところに、妹がわりこんできた。また、「Tチャンガコンナトコニキチャッタ、キー」といいかけたので、母親が「Tチャンハ、電車ノ車掌サンヨ、ノセテアゲテ」というと、「イイヨ、ノツテモイイヨ」とにっこり笑う。そして、Tがリングの皮を食べていると、「車掌サンガリングノ皮タバテルヨ」といって、おかしくして笑う。こんなところから、妹との遊びの交渉が展開していった。

同じ子どもが二才三ヵ月のころである。あるとき、「カヨウビチャン」という想像上の友だちをつくりはじめた。「カヨウビチャンノトコニイクノ」とか、絵本をみていて幼稚園くらいの女の子の絵

をみて、「カヨウビチャン、ガツコウニイッテルノカシラ」などといっている。このような想像上の友だちがあらわれるのには、直接の理由もあるようである。隣家に幼稚園の女の子がいて、日頃そこには自由に出入していた。ところが最近は大工さんが通路で仕事していて、ひとりでは通れなくなってしまった。それに加えて、妹が歩けるようになったので、この女の子は妹の方にも注目して、自分は以前ほどかまってもらえなくなってしまった。それで、隣家にいきかけては、ひきかえしてきて、カヨウビチャンに電話をかけた。り、カヨウビチャンとままごとをしたりするのである。このような想像上の友だちについては、丹羽も、本講座 63巻11号に述べている。

同じ子どもが、三才になる直前のころ、大きいお兄さんやお姉さんのように、大きくなりたいということが強い欲求となってきた。

「アタシ、コドモジャナイヨ、オッキオネエチャンヨ」と、何かにつけていっている。お菓子をわけるとき、「子どもの分」というとすかさずに「アタシ、コドモジャナイヨ」という。子ども用の小さい茶碗では決してのまない。知らない人が、小さい茶碗を食卓に並べておいたりすると、キーといつて泣きわめくこともある。自分の欲することを、いつでもはつきりと言語で表現できるとはかぎらないので、泣いたり怒ったりして表現することがあり、その原因が

つかめないで、叱ったりおさえつけたりすると、事態を紛糾させることがしばしばある。

ここに述べた例は、幼児前期の子どもの心理を示す一例にすぎない。具体的な行動に接して、その気持ちの動きを捉えながら対処していくことが、この時期の保育に当って必要である。

(2) 依存と独立

一、二才台は母親に対する依存の欲求のもつとも強い時期である。子どもは何かにつけて母親のところに行ってきて、抱かれたがる。気げんの悪いときにはいっそう母親から離れない。ひとりで遊んでいるときでも、大きい音がすると母親のところにとんでくるし、見知らぬ人がくると母親の後ろにかくれる。ふだんはひとりよく遊ぶ子どもでも、新しい場所に行くとき母親の傍から一センチも離れないでくっついたきりというようなこともしばしば見るところである。また、何かにつけて母親のところへ話しかけにきたり、見てもらいにきたり、ホンヨンデ、エカイテといつてうるさくせがむのもこの年令である。

母親の傍にいっしょにいたいというのは、幼児前期の子どもに共通に見られることであるとともに、このことは人格形成の上にも、大きな意味をもっている。子どもは母親に信頼の対象を見出し、人

間関係の基礎を学ぶのである。子どもの信頼に対して母親がこたえてやる時には、子どもは信頼に対する応答を経験し、安定した人間関係がつけられていく。子どもが母親の傍にいったとき、母親に拒否され、あるいは受けとめてもらえない場合には、依存の欲求はいつそう強くなり、子どもは、うるさいくらい母親にまつわりつくようになる。さらに母親が拒否する場合には、子どもはもはや、母親に依存することを求めなくなる。それとともに、母親との間の信頼関係も断ち切られてしまう。

他方、自分の能力を自分で使用したいという欲求も、早くより子どもの中にある。自分でやれるようになったことに母親が手をだそうとすると、子どもはそれをいやがる。熱心に遊んでいるときには、母親がはいりこむ余地がない場合も多い。このような独立の欲求がみだされる経験は、幼児前期において必要である。このことは、依存の欲求をみたしてやることとかならずしも矛盾しない。母親の傍で安心した幼児は、不安なく外の世界にでていき、そこで思う存分遊ぶことができる。そして、いやなことや不安なことが生ずると、母親の傍にいつて慰められ、また外にでていく。こうして、次第に母親がいなくても安心してふるまえる自分の世界がひろがっていく。この時期に依存の欲求がみだされなかった子どもは、いつまでもおとなとの関係が不安定であることが多く見られ、幼児前期には、依存の欲求をみたしながら、独立の方向へむけていくことが

重要な課題といえよう。

ナーサリースクールや、保育園の先生の場合も同様のことを考えることができる。ことに保育園のように、母親から長時間離れる場合には、保育者は幼児の依存の欲求を十分に受けいれることにつとめる必要がある。

また、この年令の幼児は、入園当初は母親から離れることに不安を感じることが多いから、あまり急激に母親から離さない方がよい。次第に先生にも親しみ、場所にも馴れていったときに、母親から離れるレディネスができてくる

(依存と独立については、本講座 64巻8号 小此木啓吾 精神発達参照のこと)

二、発達の経過と保育上の諸問題

幼児前期の発達を、日常生活の中で現象的にあらわれた行動について整理してみると、いくつかの段階に分けてみるることができる。

幼児前期に該当する段階は次のものである。(註)

(乳児の分については、本講座 63巻4号を参照のこと)

運動 第5段階 歩行の完成

第6段階 運動技能1

探索 第4段階 探索的試行

第5段階 構成的操作

社会 おとなとの交渉

第4段階 相互交渉

第5段階 自己統制

子どもとの関係

第1段階 受動的関係

第2段階 積極的交渉

食事・排泄・生活習慣

言語 第2段階 はなしことばの発生

第3段階 言語生活の確立

津守 真・稲毛教子 乳幼児精神発達診断法1—3才

大日本図書 昭36

津守 真・磯部景子 乳幼児精神発達診断法3—7才

大日本図書 昭40

次に、それぞれの発達の経過の中で、保育上の問題点について述べる。

(1) 運動

1才台の半ばで大部分の子どもは歩行が完成し、さらに身体を使用する能力が増して、3才になるころには、一応、三輪車にも乗れるし、すべり台もすべることができるようになり、階段の昇降も相

当にできるようになる。幼児前期の子どもは、身体を動かすこと自体が遊びであり、保育上も、十分に走りまわったり、ボールを使ったりすることのできるような空間が必要である。(本講座 64巻1号 岡本卓夫 運動能力について参照のこと)

(2) 探索

この年令では、子どもは、いろいろな材料をためしみるものがさかんである。まず、水や砂があげられる。これは、空間的にひろがりがあり、解放感を与え、また、形が容易に変化するので、この年令の単純な能力にも応ずることができる。家のまわりの泥あそびが、昔から子どもの最初のアそびのひとつであることは、発達の理由のあることである。これを室内向きにしたものが、フィンガーペイントや、各種の粘土であり、幼児前期の保育材料として重要なものといえよう。さらに、つみきは、積んだり並べたり、いろいろにつなぎ合わせたりするためすことのできる材料である。子どもはこのような物を操作して成功感を味わうことにより、自立性ができ、知的な発達も促進されるので、子どもに満足のいくまでいろいろに扱わせる必要がある。

3才に近づくと、物の扱いにまとまりができ、構成の工夫があらわれてくる。絵やつみきにも形ができてくる。紙なども、セロテープやのりでつなぎ合わせ、缺で切り刻んだり、折ったり、それをさ

らにはりあわせたりなど、いろいろとためしてみることに喜びを感じ、それに熱中する。

子どもの思うようにためすことのできる材料を与え、形をつけたり干渉したりしないで見守ることが、幼児前期の保育にとって必要といえよう。

(3) 社 会 性

幼児前期の子どもの同志の交渉のしかたは、その初期にあつては互いに受動的であつて、積極的な働きかけにまでいかない。しかし、子どもに対する関心は強く、いっしょの場所にいるということがたのしい。平行遊びの段階である。3才に近づくと、やや積極性がでてきて、手をつないだり、はなしをしたり、子ども同志で追いかけてっこをしたりするようになる。また、年長の子どもがいっしょだとのりものごっこやままごと遊びのようなごっこ遊びの中にまじつて、いっしょについてまわることなどもできるようになる。しかし、友だちとの遊びからは、途中で脱落して、ひとりにもどつてしまふことも多い。3才になつても、その遊びは、平行あそびが大部分を占めているといえよう。

平行あそびはこの時期の特色であるとともに、保育にもこれを尊重する必要がある。すなわち、一方においては、友だちといっしょにいる生活の場を多くするとともに、他方においては、友だちといっ

しょの場でも、めいめいがそれぞれの遊びに従事することが必要である。集団保育だからといって、みんな共通のことを同時にやるというようなことは、この時期には適さないといえよう。むしろ、友だちと共通の室内の中で、それぞれの活動を追つている中に、友だちとの交渉の機会ができ、その機会をとらえていくならば、子ども同志の交渉を中心とした遊びにもつていくことが次第に可能となるであろう。箱つきや、ままごと道具、のりものごっこの材料などは、子ども同志を結びつけていくのに役立つ材料であろう。

(4) 生 活 習 慣

3才までに、食事と排泄がたい自立する。幼児前期は、このような基本的な生活習慣の面で重要な時期といえる。

一才前後より、子どもは匙や手を使って自分で食べることに興味をもつが、こぼすことも多いし、食べ方もまずい。しかし、その時期におとなが食べさせていると、食事の自立の適期を逸してしまふ。二才ころには、子どもは自分の食器もわかるし、食べ方もかなり上手になるが、こぼすことはまだかなり多い。そして、3才になると、だいたいこぼさないで食べられるようになる。だから、幼児前期の期間は、こぼしたり、よごしたり、手を使つたりすることを許容しながら、それでも、おとなは手をかさなないで、自分で食べることをすすめる時期といえる。

排泄は、一才半から二才の間くらいに、予告をするようになる。

最初は、ときどき教えるという程度で、それにも起伏がある。そして、二才半くらいまでに、たいがい、おしっこの前に教えるようになり、昼間はおもらしをしなくなる。しかし、夢中になって遊んでいるときには失敗することもある。そして、三才までには、大部分の子どもが夜もおむつがいらなくなる。排泄のしつけは、急ぎすぎても効果が上らない場合が多い。また、失敗したときに叱っても、それは子どもの不安を増して、逆効果になる場合が多い、排泄習慣の成立の時期は、個人によって違うので、一才半から二才半くらいの間というかなり長い期間のゆとりをもって、その間で機会をみて、機会がきたら手をぬかないで世話をする必要がある。

排泄の習慣の成立には、とくに、たのしさと快さが必要であつて、便所を美しく飾ったり、保育室の中に排泄室をとりいれたりなどの環境的考慮も重要である。

(5) 言 語

幼児前期の間に、子どもはことばをしゃべるようになる。言語生活の獲得という点ではこの時期はめざましい時期である。一才三ヶ月にはわずか数語の単語しかはなせなかったのが、一才半から一才九ヶ月には語彙は急激に増加し、二才には、二つくらい単語をつけて文章にし、三才までにはおとなとの会話にこと欠かないように

なる。(その詳細は本講座 64巻4号 村井潤一 言語発達参照)

この間には、おとながいつしよにおしゃべりすること、保育者自身もゆたかなことばを使用することが、子どものことばを豊富にするのに役に立つ。

良い絵本を子どもの手近に備えて、子どもがいつでも手にとつて見られるようにしておくこと、子どもにたのまれたら、できるだけいつしよに本をよんでやる必要がある。この年令では、多勢でいつしよに本をみるよりも、ひとりかふたりで、あるいは数人でゆつくりとおしゃべりしながら本をみる方がよい。

二才前後になると、絵がなくても、おはなしだけをきくこともできるようになるが、最初はごく短時間で、身近な生活のできごとである。それから、むかしばなしなどのかんたんな童話をもきけるようになる。

自分のほしいものごとばでいわせるように、いろいろの機会をとらえることも、三才に近づくころにはたいせつになる。それまで泣いたり、わめいたりして訴えていたことを、ことばで表現するようになる。子どもは感情を自分で統制することが可能になってくる。また、友だちに対して、「かして」とか「いれて」とか「ありがとう」というような対人関係を円滑にするためのことばを、おとなもつとめて使用し、折にふれて、このようなことばを用いるようにしていくのがよい。